

縄文土器の誕生

今から1万4千年前頃、日本列島に初めて土器が誕生します。この土器が誕生した時をもって、縄文時代の始まりとされます。

それ以前の旧石器時代にはなかった煮炊き用の道具「土器」の出現により、人々の暮らしに大きな変革をもたらされました。土器の誕生以前は、肉を焚火で焼くことは可能でしたが、煮込むことはできませんでした。土器により、肉や魚貝を煮込むことが可能になったことに加え、ドングリ類やクズ・ワラビの根など加熱しないと食べられない植物を食料とすることができるようになりました。特にドングリ類はカロリーも高く、長期保存も可能なため、縄文人にとって大切な食糧となりました。こうして食材の幅を広げた縄文人は日本列島全体に広がり、1万年以上もの間、安定した定住生活を営みました。



ゆうぜつせんとうき
有舌尖頭器(縄文時代の始め頃の石器)

堂上平遺跡・西ヶ洞遺跡(鶴里町)
1万4千~1万2千年前



鉢形土器

妻木平遺跡(妻木町)
5千年前頃



深鉢形土器

入海道遺跡(鶴里町)
5千年前頃

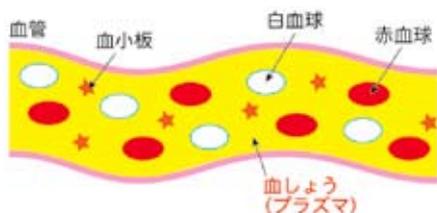
カガクへのトビラ Vol.6

核融合科学研究所 / 総合研究大学院大学 ☎ 0572-2222

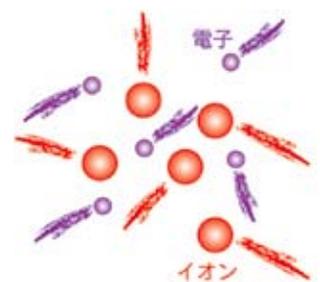
「プラズマ」の名前の由来は血液の成分

核融合科学研究所で研究している「プラズマ」は、電気を帯びた粒子(電子やイオンなど)が、バラバラに運動している電離気体の状態を意味します。固体、液体、気体に続く「物質の第4の状態」とも呼ばれます。ところが元々、「プラズマ」という言葉は「形作られたもの」という意味を持つギリシア語に由来していて、血液成分の一つである血しょう(英語でブラッド・プラズマ)を表す言葉として使われていました。どうして血液の成分の名前が、全く違う物質の状態に使われているのでしょうか?

実は、1927年にアメリカの電気会社で水銀蒸気の研究をしていたアーヴィング・ラングミュア(1932年にノーベル化学賞受賞)が、電気を帯びた粒子が飛び回っている気体の状態に初めて「プラズマ」という呼び名を与えました。電子やイオンといった粒子はプラズマの中で自由に動き回りますが、その様子が、血しょうの中で赤血球・白血球などが動き回る様子を連想させたので、「プラズマ」という名前を付けたのです。最初は電気会社の商標として使われていた「プラズマ」という名前が、長い年月をかけて正式な名前として浸透したというわけです。



血液中のプラズマ



物質の状態を表すプラズマ

ところで、医療や食品の分野でも、「プラズマ」という言葉を耳にすることがあります。例えば、マイコプラズマやプラズマ乳酸菌のように。これらは、私たちの研究しているプラズマとはあまり関係がないようです。

